

日本 CLIL 教育学会第 5 回大会

The 5th J-CLIL Annual Bilingual Conference

2022 年 10 月 15 日(土) 10:00-18:00

October 15 (Sat), 2022

早稲田大学(戸山キャンパス) & オンライン(zoom)

Waseda University (Toyama Campus) & Online (zoom)

テーマ: 多様な文脈での実践共有: 次のステップに向けて

Theme: Sharing practices in diverse contexts: Taking the next step

大会プログラム Conference Program

- 10:00-10:05 開会挨拶: 池田真 (J-CLIL 会長)
(Zoom 1) Opening greetings: Makoto Ikeda (J-CLIL President) [bilingual]
- 10:05-10:25 CLIL 教員研修プログラム報告 (笹島茂)
(Zoom 1) CLIL Teacher Training Program (CTEP) report (Shigeru Sasajima) [bilingual]
- 10:25-11:20 基調講演 1: ブルームのタクソノミー (教育目標分類) 再訪: 原著と改訂版 (池田真)
(Zoom 1) Keynote Speech 1: Revising Bloom's taxonomy of educational objectives: Original and revised editions (Makoto Ikeda) [Japanese] *This talk is repeated in English (Zoom 2, Presentation 7).
- 11:25-12:00 賛助会員発表
(Zoom 1) Supporting members' presentations [Bilingual]
- 12:00-12:30 昼食 Lunch
- 12:30-16:10 会員発表 1~16、招待発表
(Zoom 1, 2, 3) Members' presentations & symposium 1-16 [Japanese, English]
Invited special talk [English]

		Zoom 1	Zoom 2	Zoom 3
	司会	早坂裕介・高木由香理	馬玉晶・油木田美由紀	白井龍馬
1	12:30-12:50	上野育子「日本の大学における CLIL コースのファシリテーション: 教材開発プロセスの視点から」	Nate Olson “Innovation theory for team-taught soft CLIL: A case study of junior high school adoption and implementation”	[Symposium] 白井龍馬, 笹島茂 & 松島恒熙 「CLIL における authenticity とは」
2	12:55-13:15	小島さつき「大学における CLIL アプローチ導入の可能性とその検証」	Sumire Sandy Hayashi “Is a comfortable chair a good design? Using essential questions to improve university students' analytical	↑


			thinking skills in a CLIL lesson on product design”	
3	13:20-13:40	渡邊千佳子「デジタルネイティブ世代の日本語学習者の興味拡大、情報の多様性確保のための実践報告」	Barry Kavanagh “Cultivating university students’ pragmatic competence through an integrated academic speaking and listening course”	↑
4	13:45-14:05	富永裕子 & シャープ昭子「Bilingual book ができるまでー英語学習者と日本語学習者の協働による Virtual Exchange Program の実践から」	Yukimi Hayafune “How CLIL influences Japanese university students’ motivation and confidence in learning English”	
	司会	富永裕子・白井龍馬	土屋慶子・笹島茂	
5	14:10-14:30	二五義博「20 世紀初頭の日本における CLIL 教育論と実践の検討」	Anna Savinykh “Educational transfer of CLIL: diversity of context and opportunities”	
6	14:35-14:55	高橋誠史「英語 Basic User の大学生に対する ESP 講座での CLIL 実践と考察」	Hirosada Iwasaki “Analysis of TED Ed videos for CLIL class”	
7	15:00-15:20	川島嘉美 & 鬼頭美帆「Living with Diversity : 多様性 CLIL の実践と効果の検証」	[Plenary talk 1 summary] Makoto Ikeda “Revising Bloom’s taxonomy of educational objectives: original and revised editions”	
8	15:25-15:45	松島恒熙・清水将吾「英語による哲学対話の実践ーCLIL と P4C の関係ー」	[Invited special video talk] Xavier Gisbert “Bilingual education in Spain”	
9	15:50-16:10	高柳真理「新しい学部科目『統合日本語』の試みー学部横断的に選ばれた各テーマに 4C を取り入れた授業のデザインとその実践を振り返るー」	↑	

- 16:20-17:20 基調講演 2 (Plenary talk 2): Oliver Meyer (Johannes Gutenberg University Mainz)
”Beyond CLIL: Pluriliteracies Teaching for Deeper Learning”
(Zoom 1) Introduction by Makoto Ikeda (J-CLIL President)
- 17:20-17:30 閉会挨拶：バリー・カバナ (J-CLIL 副会長)
(Zoom 1) Concluding remarks: Barry Kavanagh (J-CLIL vice president) [Bilingual]

Conference Room Schedule & Abstracts

Zoom 1		
10:00-10:05	開会挨拶：池田真 (J-CLIL 会長) Opening greetings: Makoto Ikeda (J-CLIL President)	Bilingual
10:05-10:25	CLIL 教員研修プログラム報告 (笹島茂) CLIL Teacher Training Program (CTEP) report (Shigeru Sasajima)	Bilingual
10:25-11:20	基調講演 1: ブルームのタクソノミー (教育目標分類) 再訪: 原著と改訂版 (池田真)  Keynote Speech 1: Revising Bloom's taxonomy of educational objectives: Original and revised editions (Makoto Ikeda) *This talk is repeated in English (Zoom 2, Presentation 7).	Japanese
11:25-12:00	賛助会員発表 Supporting members' presentations	Bilingual
12:00-12:30	Lunch	
12:30-12:50 発表 1	上野育子 (立教大学) 「日本の大学における CLIL コースのファシリテーション: 教材開発プロセスの視点から」 ファシリテーションとは学習者がタスクを完了するために、必要な知識、情報、リソースを提供しサポートすることである。学習する内容を目標言語 (英語) で学ぶ CLIL (内容言語統合型学習) では、ファシリテーションは非常に重要な役割を持つ。発表者は CLIL における translanguaging という概念を教材開発時から取り入れることで学習者の授業内母語使用を教材内でも肯定した。本発表では、教員のファシリテーションによって学習者の心理的負荷が取り除かれ、内容について理解を深めながら、言語力も高めることができたプロセスを実践報告する。さらに、教材開発時の language teacher と content teacher の視点の違いにも着目し、CLIL 授業の適切なファシリテーションとの関連性にも言及する。	Japanese
12:55-13:15 発表 2	小島さつき (宮城大学) 「大学における CLIL アプローチ導入の可能性とその検証」 本研究は、内容言語統合型学習 (CLIL) のアプローチを、英語を専門としない、大学の一般教養科目で取り入れることの可能性を学生アンケートから検証することを目的としている。調査参加者は、大学 2 年生 48 名で、学期の最初と最後に自由記述アンケートを行い、CLIL クラスとこれまでの EFL クラスについて省察してもらった。また、TOEIC の reading と listening テストも学期の最初と最後に行い、CLIL が、英語学習者の reading や listening の向上に寄与するののかに関して検証を行った。さらに、学期の最後に CLIL クラスについて選択式アンケートを行った。結果として、半期での reading と listening 力の向上はみられなかったものの、アンケート結果から、CLIL 授業への学生の積極的参加や主体的参加がみられた。	Japanese
13:20-13:40 発表 3	渡邊千佳子 (東京都立大学) 「デジタルネイティブ世代の日本語学習者の興味拡大、情報の多様性確保のための実践報告」 近年のデジタルネイティブの日本語学習者はフィルターバブル等の影響により自身の興味のある分野の情報には大変詳しいが、その他に関しては関心が薄い傾向にある。語学学習は獲得目標言語の背景にある文化的社会的知識が不可欠であることから、そうした傾向に危機感を抱いていた。そこで筆者が担当する大学の留学生向けの日本語授業で学生の興味拡大や情報の多様性確保を目標としたタスクを行った。最新のニュースを知り、伝え、仲間と共有し意見交換をすることで目標に近づくことを試みた実践報告である。	Japanese
13:45-14:05 発表 4	富永裕子 (清泉女学院大学) & シャープ昭子 (カルガリー大学) 「Bilingual book ができるまでー英語学習者と日本語学習者の協働による Virtual Exchange Program の実践から」 本発表は、2021 年度第 4 回大会で発表した授業実践の追報告である。CLIL を念頭に、2021 年度よりカナダの大学で日本語を学ぶ学生と日本の大学で英語を学ぶ学生を対象にオンラインだからこそこできる授業を工夫し Virtual Exchange Program を実践している。本発表では、2022 年度に実施したプログラムの 1 つ「Bilingual Book の	Japanese

	作成」を通して、電子ブック作成ツール「Book Creator」を使用して学生が作成した本の紹介と、使用言語を入れ替えながらお互いの学習目標言語を支援し、協働作業を通して達成したタスクや学生の自己評価などについて報告する。	
14:10-14:30 発表 5	二五義博（山口学芸大学）「20世紀初頭の日本における CLIL 教育論と実践の検討」 次世代の CLIL の在り方を考える際には、現在の海外や日本での様々な実践例を共有するだけでは不十分である。発表者は日本の過去からもっと学ぶべきと考え、以下の2つの視点より、100年以上前の日本に存在していた CLIL に目を向ける。第1は、明治時代にはすでに CLIL に基づく英語教育論がいくつか展開されていたが、中でも畠田與惣之助の『英語教授法綱要』（明治42年）及び『英語教授法集成』（昭和3年）に焦点を当て、英語科と他教科との関係がいかに重要であったかを明らかにする。第2は、少なからず教育論の影響を受けたと思われる、明治時代の小学校用国定英語教科書を取り上げ、算数、理科、社会科、図画や体育等の教科内容と統合して英語を教えていることから、この時期の教育は既に CLIL だったことを明らかにする。	Japanese
14:35-14:55 発表 6	高橋誠史（梅光学院大学）「英語 Basic User の大学生に対する ESP 講座での CLIL 実践と考察」 本発表では、英語 Basic User（CEFR A1-A2）の大学生に対して CLIL 形式でおこなっている ESP 講座（英語プレゼンテーションの方法／パラグラフライティングの習得を目的としている）の実践報告を行う。学習者が内容・言語両面で真に新しい知識技能を習得してこそ CLIL といえる（池田, 2021）。しかし、高度な内容を扱うと Basic User の英語力では実施が難しい。一方で、学習者の英語力に合わせて内容のレベルを下げては CLIL の利点が減ってしまう。特に、大学生となると英語力の如何に関わらず認知レベルは成人であり、簡単な内容では知的興味を満足させることができず、ひいては学習意欲の低下につながる可能性がある。高い認知レベルにアンバランスな英語力を持った学習者にとって適切な CLIL の実施方法とはどのようなものだろうか。Basic User を対象にした CLIL や TBLT の研究は少なく、成人の Basic User を対象としたものとなるとさらにその数は減る。この問題を、自身の大学での CLIL 授業実践を通して考察するとともに、彼らにとっての望ましい CLIL 授業のあり方を提案したい。	Japanese
15:00-15:20 発表 7	川島嘉美（石川工業高等専門学校） & 鬼頭美帆（石川工業高等専門学校）「Living with Diversity：多様性 CLIL の実践と効果の検証」 多様性をテーマとして大学1年相当の学年を対象に英語科目で実施した CLIL の実践報告を行い、その授業に対する学生の反応や取り組みを通して効果を検証する。同実践では、日本国内で生活していると意識・実感しにくい内容をサブテーマとして展開した。例えば、LGBTQ、race や ethnicity などに基づく差別問題、移民・難民問題、異文化理解の過程で生じうる誤解などである。以上のように、この単位では通常科目では取り上げることが少ないテーマを提示し、問題解決型授業に向けての第一歩となる取り組みを目指した。本発表では授業の組み立て方や実践内容を紹介するとともに、アンケート等を通して学生から得られた反応や発表課題の仕上がりから実践の効果を検証する。	Japanese
15:25-15:45 発表 8	松島恒熙（信州大学） & 清水将吾（上智大学）「英語による哲学対話の実践－CLIL と P4C の関係」 哲学の演習科目においては、海外の文献を講読し、それを教員が日本語で解説する授業が多い。しかしながら、それは「哲学思想を学ぶ」ことに留まり、本来の意味での「哲学する」ことに到達しているとは言い難い。そこで本発表では、文献講読だけでなく英語による哲学対話を組み込むことによって、この課題を克服する可能性を探る。清水は自身の担当する哲学演習の授業において、英語文献講読と並行して英語で哲学対話する活動を取り入れている。この哲学対話は P4C(Philosophy for Children)の手法を用いている。そこで松島は、CLIL の理論と P4C の理論を比較検討しながら、清水の実践を分析する。さらに、P4C という哲学的思考のプロセスがどのように CLIL に影響を与えうるか、フロアと共に哲学したい。	Japanese
15:50-16:10 発表 9	高柳真理（城西国際大学）「新しい学部科目『統合日本語』の試み－学部横断的に選ばれた各テーマに4Cを取り入れた授業のデザインとその実践を振り返る－」 本校にある学部に関わりのあるテーマを選び、留学生に大学生としての教養を身に付け、それらの内容を日本語でコミュニケーションできる力を身に付けることを目的として作成されたテキストを使った科目「統合日本語」について発表する。テキストの各課テーマは、メディア学部「広告」、国際人文学部「おもてなし」「日本の文化」「異文化の中でのアイデンティティー」、薬学部・看護学部「生命を操る」、福祉総合学部「福祉は誰のため?」、環境社会学部（2022年3月末閉部）「世界遺産」、該当	Japanese

	学部なし「科学のゆくえ」である。これらのテーマの学習内容にはどのような4つのCがあったのか示し、実際に行った授業の一つの課（「生命を操る」）を取り上げて、どのように授業を展開したか説明し、今後の課題にしたいことを発表する。	
16:20-17:20	<p>基調講演 2 (Keynote Speech 2): Oliver Meyer (Johannes Gutenberg University Mainz) “Beyond CLIL: Pluriliteracies Teaching for Deeper Learning”</p>  <p>Pluriliteracies Teaching for Learning (PTL) constitutes a relatively recent development in Content and Language Integrated Learning (CLIL). This pedagogic approach has been developed to provide pathways for deeper learning across languages, disciplines and cultures by focusing on the development of disciplinary or subject specific literacies. Deeper learning - by which we understand the successful internalization of conceptual knowledge and the automatization of subject specific procedures/skills and strategies – is considered to occur only if learners are taught how to express their knowledge appropriately and in an increasingly complex and subject adequate manner. In my keynote presentation I would like to introduce the revised Pluriliteracies Model for Deeper Learning and present preliminary research data. I will also introduce the five core principles of Pluriliteracies Teaching for Deeper Learning along with matching guiding questions which were developed to help teachers design what we have coined deeper learning episodes. An analysis of classroom materials for different age groups will showcase practical ways of mapping and creating learner progressions in order make deeper learning happen and to take (CLIL) learning to the next level.</p>	English
17:20-17:30	<p>閉会挨拶：バリー・カバナ (J-CLIL 副会長) Concluding remarks: Barry Kavanagh (J-CLIL Vice President)</p>	Bilingual

Zoom 2		
12:30-12:50 発表 1	<p>Nate Olson (Sophia University) “Innovation theory for team-taught soft CLIL: A case study of junior high school adoption and implementation”</p> <p>This presentation discusses Rogers’ (2003) diffusion of innovation theory and how it can be applied to the adoption and implementation of Soft CLIL at a junior high school. Over a seven-month period, a Japanese teacher of English (JTE) and an assistant language teacher (ALT) collaborated to facilitate a large-scale, learner-centered survey project for their third-year students. Students created preference surveys using Google Forms, analyzed results using Google Sheets, and shared video-recorded presentations with the rest of the class. This presentation describes the innovation-decision process of the participating teachers, from their first knowledge of team-taught Soft CLIL to confirmation of their continued use of the innovation. Pre- and post-project teacher questionnaires and interviews revealed that both teachers had positive experiences with implementation and recognized Soft CLIL to be motivating for themselves and their students, resulting in its continued adoption.</p>	English
12:55-13:15 発表 2	<p>Sumire Sandy Hayashi (Sophia University) “Is a comfortable chair a good design? Using essential questions to improve university students’ analytical thinking skills in a CLIL lesson on product design”</p> <p>A hallmark of analytical thinking is to break down an issue into smaller components and make sense of potentially contradictory evidence (Anderson & Krathwohl, 2001). This presentation argues that using essential questions in a CLIL lesson can help learners acquire such higher-order thinking skills (Wiggins & McTighe, 2005). I report on how I planned and taught a CLIL lesson based on an essential question from the discipline of product design: “Is a comfortable chair a good design?” Quantitative analysis of the students’ writings (n = 69) in response to the question revealed that students were able to develop a more complex and analytical understanding of “good design.” In addition, qualitative analysis of the students’ written reflections demonstrated that essential questions can engineer surprise to facilitate learning, engage learners to confront complexity, and help learners generate their own questions.</p>	English
13:20-13:40	<p>Barry Kavanagh (Tohoku University) “Cultivating university students’ pragmatic competence through an integrated academic speaking and listening course”</p> <p>Pragmatic competence is a crucial skill for successful communication in a second</p>	English

発表 3	<p>language. Research indicates that cultural differences can lead to pragmatic failure that can often hinder cross-cultural communication. This talk will give an account of an Integrated Academic Speaking and Listening course taught through a CLIL approach based on the theme of cross-cultural differences within university life. Students learned the speech acts of making requests, refusals, apologies and complaining within university campus situations both in Japan and abroad and were given a pre and post course survey and test on these speech acts and pragmatic competence. Findings showed that there were significant differences in the confidence level and pragmatic ability of the students after the course.</p>	
13:45-14:05 発表 4	<p>Yukimi Hayafune (University of Tsukuba, graduate school) “How CLIL influences Japanese university students’ motivation and confidence in learning English”</p> <p>This study investigated how CLIL influences Japanese university students’ motivation and confidence in learning English for specific purposes. Forty-four students in engineering took part in this study. Their motivation and confidence were measured using questionnaires before and after seven CLIL lessons. The result showed increases in their confidence and motivation to learn with their classmates. An open-ended question of an additional questionnaire after the seven lessons showed their improved motivation and autonomy to learn English. Increased confidence and motivation may help their continuous learning of English even after the CLIL lessons ended.</p>	English
14:10-14:30 発表 5	<p>Anna Savinykh (Hokkaido University, graduate school) “Educational transfer of CLIL: diversity of context and opportunities”</p> <p>It was almost 30 years from the implementation of CLIL in Europe. CLIL moved from the "umbrella term" to the flexible educational approach these years. Based on the educational transfer theory, the presentation analyzes the ways of CLIL transfers to different regions, different languages, and different areas of teaching, such as foreign language, second language, heritage language, and official language teaching. The diversity of context and the logic of the educational transfer provide the definition of the transfer type and the transfer stage for EFL/ESL, JSL, and heritage language education in Japan.</p>	English
14:35-14:55 発表 6	<p>Hirosada Iwasaki (University of Tsukuba) “Analysis of TED Ed videos for CLIL class”</p> <p>This is a qualitative study on using TED Ed videos in a university in Japan. TED Ed videos are different from other TED talks in that they are short animated videos trying to spark interest and curiosity about ideas of young learners. However, the contents of those videos are often highly academic despite their seemingly “easy-to-understand” appearances. Therefore, the present study first compares two TED Ed videos with some other TED talks in terms of text profiling such as readability, sophistication, and lexical diversity. Then it reports some of the pedagogical problems when TED Ed videos were used to gain presentation literary skills, including defining terms and paraphrasing low-frequency words.</p>	English
15:00-15:20 発表 7	<p>[Keynote Speech 1 Summary] (*This is a shortened talk of keynote speech 1 presented in Japanese.)</p> <p>Makoto Ikeda (Sophia University, JCLIL President) “Revising Bloom’s taxonomy of educational objectives: original and revised editions”</p> <p>One of the most conspicuous features of CLIL lies in the intentional inclusion of ‘cognition’ in lesson design and materials development. This is frequently achieved by drawing on Bloom’s taxonomy, identifying the type of thinking (remembering, understanding, applying, analysing, evaluating, creating) used in each learning activity, and consciously containing higher-order thinking skills (the last three types). This use of the taxonomy, however, does not fully activate its intended functions. In this talk, I will compare the original edition by Bloom et al. (1956) with the revised version by Anderson et al. (2001), clarify the principles, classification, and application of the taxonomy, and present ideas and examples for CLIL pedagogy. The final goal of this talk is for teachers to further cultivate students’ thinking skills by understanding Bloom’s taxonomy more precisely and employing it more effectively.</p>	English
15:25-16:10 発表 8	<p>[Invited Special Video Talk] Coordinator: Yosuke Kono</p> <p>Xavier Gisbert (President of the Spanish Association for Bilingual Education)</p> <p>“Bilingual education in Spain”</p>	English



(* The Spanish Association for Bilingual Education is a partnership association of J-CLIL.)

Bilingual Education, together with Technology, is probably one of the best innovations in education of the last decades. It offers students an added value to their education allowing them a better future. This session will give a general overview of the teaching and learning of foreign languages in mainstream education in Spain and will explain

how Bilingual Education has been implemented all over the country, its evolution up to the present situation and the benefits it provides to schools, teachers, and students.

Zoom 3

12:30-
13:40

[Symposium]

白井龍馬 (清泉女学院中高) , 笹島茂 (CLIL-ITE) & 松島恒熙 (信州大学)

「CLIL における authenticity とは」

発表 1

CLIL における authenticity の重要性は教材選定の観点から考えられることが多いが、このシンポジウムではこの側面以外の authenticity に焦点をあて、CLIL との関連について考えを深める。白井は自身の実践を authenticity の観点から振り返り、どのような教材や指導法が効果的であったかをまとめる。松島は哲学的観点から authenticity について考察し、CLIL との理論的なつながりの可能性について述べる。笹島は複雑性理論と ESP の観点から authenticity について説明する。最後に、それまでの議論を踏まえた上で、笹島・松島・白井が CLIL と authenticity の関係についてトークセッションを行い、主題についての考察を深めてゆく。なお、トークセッションの後半はフロアにもひらかれ、自由に質疑応答ができる形式で行われるものとする。

Japanese